

台本…京田勝馬

企画・演出…上條充

まぶた 瞼 の 母 は

長谷川伸の不朽の名作。その世界を人形と役者が同じ舞台に立つという異色の組み合わせによってより鮮明で独特の空間を生み出しました。

幼い時に母親と生き別れ、12の時に父親を亡くした忠太郎は、生きていくためバクチ打ちというヤクザな道に入り、母の行く方を尋ねて江戸に辿り着きました。一方母親は江戸に出て、一旦は身を持ち崩したものの後添えとなって大店の女将になり、娘を一人儲けていました。忠太郎はやっと母親と巡り会うことができますが、母親は忠太郎のヤクザな姿に娘の行く末を案じて追い返してしまいます。しかし娘に諭され、二人で忠太郎の跡を追いかけて…。



かっぱれ

男の人形の踊り。江戸から明治に替わる頃に一斉風靡した大道芸でしたが、今はお座敷や寄席などでも踊られています。当時大衆の間でもてはやされた3つのテーマを脈絡なく取り上げていますが、軽妙な動きが楽しい人形の踊りになっています。

以上ご紹介の3つの演目で、上演時間は70分を予定しています。



獅子舞

太陽と力の象徴として中近東に生まれた獅子は、アジア全域に広がりました。日本では仏教の影響もあって様々な獅子舞が伝わっていて、縁起物として今でも喜ばれています。糸探りならではの趣向もあります。

「劇団紹介」

師匠・11代結城孫三郎の元で13年間修業を積んだ上條充が独立したのを機に設立した人形劇団。江戸時代から伝わる日本独自の糸あやつり人形を専門としています。伝統を基本にしつつも“今に生きる”人形を求め、更なる進化を模索しています。今まで誰もやったことのない大道芸や様々な表現者とのコラボレーションを試みています。